何が好きかと好物問われ

君の名前を返す夜

小早川

何が好きかと好物問われ君の名前を返す夜

小早川

I'm Hungary Monster

油断

Between Lovesickness

Between Love Horic

ニーハイソックス

Bitter

雨に歌えば

世界はこの手の中

オレンジの海

Geek

So serious

正解はどれでしょう

もしもこのまま

Hello, Hello

欠点

Sexual Harassment

吾輩は人である

朝チュン

配点10点

牽牛

Dear Mr. Santa Claus

ほたる

ブラッドハウンド

Even if
喪失
まな板の上
うそつき
三千世界の
酒と泪と女
酒と泪と男
酒と泪と男と女

彼氏いません

言えない

距離

幼馴染みはたちが悪い

君の名前を

I'm Hungary Monster

きっかけなんてなんだっていいって。

「へえ、ポケモンやろうって？」
おれの夏の予定を聞いた幼馴染みがニヤニヤしながら肩を叩いた。
「好きなんだろ？　好きなんだろ？　夏を満喫しちゃうんだろ？」
「それはやぶさかではないけど」
「ポケモンＧＯでラブホにゴ」
「黙れ」
そういうの考えさせるのやめろ。眠れなくなるわ。

油断

いつものように後輩を囃し立てた。人のこと言うけど君だってエロいじゃん。やーいやーい。

「あのねえ、先輩」

はー、と手元の本を閉じてため息をひとつ。

「男なんだからエロいのは当たり前でしょう？」

眉間に皺を寄せて近づけた顔に、どうしてこんなに動揺するの。

「わかりました？」

「わ……わかりました」

「なんで敬語なんですか」

「だって」

「何？」

声小さいですよ、と寄ってくるのから逃げて立ち上がった。意識したら負けだ。ち

ゃんと先輩してなきゃ私は、
「逃げるなって言ったくせに」
模範を示すことも出来なくなってしまう。

翌日からいつも通りに過ごした。おはようございます、お疲れ様でした。でも顔は見れない。思わず身構えて、走り去ってしまう。
「なんだ？　お前なんかしたの？」
「いえ。まだ何も」
「じゃあなんで逃げられてんの」
「さあ」
さあ、じゃないよ。誰のせいよ。ばか。

Between Lovesickness

西陽の射し込む教室に二人。告白するにはおあつらえ向きの状況だなと思いながら、教師に取り上げられて返してもらったばかりのエロ本を眺めている。

「お前どの子がいい？」

「この子。巨乳だし」

「あー、好きそう」

やっぱ言えねえよなあ。おれ、巨乳じゃないし。

そんなふうに自嘲しながら、仕方なくその巨乳と自分の共通点を探してみる。足も手も２本、鼻はひとつで目は２つ、乳首も２つ。あれ、意外といける？

「な、この子よりおれの方がいいかもよ」

「は？」

「巨乳じゃないけど巨根だし」

「自慢してんのかてめぇ」

ダメだ、どうすれば本気にしてもらえるのかわからん。
本気にしてほしいのかも、わからん。

お前は俺の物！……と、声を大にして言ってから間違いに気付いた。

「そうなの？」
「ちが、お前のものはおれのもの、とだな」
「心も体も？」
「いや、そういうことじゃなくて」

お前のメロンパンが食べたかっただけなのになんでこんな話に。
あーもう指ごと食っちまおうかな。

ニーハイソックス

「……前から思ってたんだけど」
椅子に掛けて頬杖をついたまま、彼の視線がこちらを向いた。
「その靴下ってどうなってるの？」
「え」
「なんでその位置で止まるの？」
「あ、これはここにゴムが入ってて」
「ちょっと見せて」
おもむろに立ち上がって距離を詰められる。
「え、ちょ、待っ、なんで触っ」
「触んないとわかんないだろ」
「だからって、今、履いてる状態で確かめる必要はないでしょう！」
「じゃー脱がすからじっとしてて」
「そうじゃなくて！！」

「うるせえなぁもう」

なんでこんなムードもデリカシーの欠片もない人が好きなんだろう、私。

Bitter

夜を注いだ珈琲ゼリーはどうやら甘味が足りない。

「ミルクありませんか？このままだと僕にはちょっと苦いんで」

「ええ。でも恋は苦いものですから」

「え？」

にやりと笑ってスプーンを差し出された。

なんだよ。気付いてるなら少しくらい甘くしてくれたっていいじゃないか。

雨に歌えば

この雨と共に君への想いも流してみよう。おあつらえ向きの激しい雨だ。古びたビニール傘が受け止めきれないくらいの。

「たとえばーきみがいるだーけで こころがーつよくなれるーことー」

古い歌を口ずさんでいたら、強風。

君の家から持ち帰ったビニール傘が音を立てて折れた。

世界はこの手の中

Amazonで買った地球の自爆スイッチが、目の前にある。彼女に電話でデートを申し込んで断られたら押すつもりだ。成功したらこれは土に埋める。去年死んだ金魚の隣に。

「……お掛けになった電話番号は現在使われておりません」

しまった。このパターンは予想してなかった。

オレンジの海

見渡す限り、鮭、鮭、鮭。

この時期の鮮魚コーナーらしいとはいえ、ちょっと多すぎやしないか。一体どうしたのかと発注担当を見ると青ざめていた。どうやら発注ミスか。なまものの足が早くなる時期だってのに、まったく。

「惣菜の主任に応援頼んで来い」

「は、ハイッ」

「あとちゃんちゃん焼きのレシピ印刷して置いとけ」

俺もたまには作るか。嫁に。

Geek

過去にメールを送れる機能がついた。さすがiphone10、今までにない革新的なデバイスと豪語するだけある。君も買うのかい？ 昔の彼女に好きだと送りたいと。何言ってるんだ、それならその手元の旧機種で今の彼女に送っても遅くない、君たちには未来があるよ。僕？ 僕はもちろん発売日に買うよ。え、歳の割にミーハーだって？ いやーハハハハ、それは大いに自覚している。やはり新しいものは早く玩びたいからね。え？ 相手？ ああ、妻に送るんだよ。まだ愛してるって、仏壇の前からね。

So serious

君は嘘をつくとき、必ず右耳に触れる。

「レポートやって来た？」「うん」
「進路決まった？」「うん」
「彼氏とはうまくいってる？」「うん」
「おれのこと嫌いなんだろ？」「うん」

……あれ？　マジか。

正解はどれでしょう

本日のお悩み相談(20代・男性)。最近入ってきたメイドが好みすぎて困っています。手を出したら彼女は父にクビにされてしまうのに。生殺しで耐えられません、とのこと。まずはお父上を説得することです。ただし前科があるなら諦めて下さい。一度失った信頼を取り戻すのは容易ではありませんし、女癖の悪さは直さないといつか刺されますので。

本日のお悩み相談（20代・男性）。最近入ってきたメイドが好みすぎて困っています。このままでは手を出してしまいそうです。手を出したら彼女は父にクビにされてしまうのに。生殺しで耐えられません、ですって。別に手を出してもいいんじゃない？パパから逃げちゃえばいいのよ。バカね。

本日のお悩み相談(20代・男性)。最近入ってきたメイドが好みすぎて困っています。手を出したら彼女は父にクビにされてしまうのに。生殺しで耐えられません、かー。

とりあえず口説いてみたらいいよ！　だって彼女が受け入れるとは限らねえじゃん？
難しいことはやってから考えろって！　な！

もしもこのまま

返事は期待するなってことでしょう？わかってますよ、いつものことだもの。私を空気だとでも思っていて、無条件で寄り添ってくれると思い込んでいるんだもの。ああ憎らしい、私という者がありながら他の女をそばに置くなんて。

でもまあ当然か。だって私、二年前に死んでるんだもんね。

もしもこのままこがれて死ねばこわくないよに化けて出る

Hello, Hello

今から話すのは、少し未来のお話だ。まだ車は空を飛ばないし、リニアモーターカーもiPS細胞も実用化されてない程度の未来。そこで僕は人の心を読む装置の開発に成功した。ノーベル賞ももらった。でもこんな発明はクソだ。おれは知りたくなかったんだよ、君が先生と付き合ってるなんて。

欠点

その執事は上から下まで完璧に整っているのに、たったひとつだけ欠点があった。
「おはようございますお嬢様」
「おは……え？　今何時？！」
焦る主人の問いかけに悪びれず微笑む。
「10時です。完全に遅刻ですね」
「……死になさい役たたず」
彼女にそう罵られたくて、今日も。

Sexual Harassment

「このバカをクビにして！」
主が私を指差して叫んだ。いつもなら笑顔でかわすのに、今日はどうやらご機嫌斜めらしい。
「生理ですか？ お嬢様」
「ふざけんじゃないわよこのセクハラ執事！！」
ええ、昨日私がご友人に跪いたのが気に入らないんでしょう？わかってますよ。だって、わざとですから。

「私をクビにするのは構いませんが、ご友人への態度は改められた方がよろしいですね。気に食わぬ相手にも優雅に振る舞ってこそ一人前のレディというものです」
「本心と違う振る舞いをするくらいなら死んだ方がましよ」
まっすぐに私を見て言い捨てる、そんな主が一層好ましい。
「それならばどうぞお好きに。余計なことを申しました」

「わかればいいのよ」
主は私から目を背け、籠の中からアルジャーノンを取り出した。弄びながらぼそりと呟く。
「だいたい誰のせいだと思って……」
「え？　誰かのせいなんですか？」
そして私をにらみつける、その視線すら好ましいのです。

吾輩は人である

猫が喋った。一緒に暮らして４年になるうちの猫。お前が話せたらいいのにな、と漏らした言葉が現実になったらしい。

「毎日毎日仕事ばっかり、男には強気に出れても女の子には超ヘタレ。そんなんだから彼女できないんだよ。あと最近口臭いよ」

おい誰だ、猫が癒し系とか言ったのは。

朝チュン

朝起きたら全裸でした。昨日は飲みすぎてしまって、風呂から出たあとそのまま寝てしまったようです。なぜ起こしてくれなかったのかと同居人に聞いたら、「風邪引くかなーと思って」という答えが。

「そしたら会社休んでくれるでしょ？」

……まあ。君が看病してくれるなら、考えないでもないよ。

配点10点

理系男子の恋模様は至極明快である。

彼女といる時間の長さはラプラス変換で求めればいいし、恋が始まらない理由は慣性の法則に照らせばよい。

なお、エントロピーの法則で示されるように、熱情は低い方に移動していずれまっ平らになる。

よって恋に意味などない。Q.E.D.

牽牛

織姫とは長い付き合いになる。年にたった一度の会瀬に焦れるのにもいい加減慣れた。

「願い事に目は通したの？」

「己が女と会えるか会えないかって時に人の願い叶えてられるか」

「そういう態度だから毎年雨なんじゃない？」

痛い所を的確に突いてくるその唇をどうやって塞ぐか、そんな事ばかり考えてる。

Dear Mr. Santa Claus

例えば私があと少し大人だったら。あなたがもう少し若かったら。

「悪いが来週から来なくていい。君はクビだ」

こんなことを言われずに済んだの？

「クリスマスにこんな親父と仕事することない。彼氏のところに行きなさい」

「もう別れたと言ったら？　ミスターサンタクロース」

トナカイにはなれないけど、この足はあなたのものだって教えてあげるのに。

ほたる

どうやらあの人は後悔しているみたいだった。はじめての夜と二回目の夜。私はどちらも一挙手一投足を覚えてる。その事さえも。

「……今日はダメ」

「なぜ？」

「一度ならず二度までもと思うと……とにかくしばらく大人しくしてないと」

「なぜ。二度も三度も同じでしょう？」

なんで私が口説いてるんだろ。ずるい人。

ブラッドハウンド

おれが警察の犬だと知っているのは上司の他にこいつだけだ。必要なときだけ情報を流してくる連絡係。上司に泥がつかないように張られた防護壁とも言う。

「なあ」

ターミナル駅の指定席券売り場。その混雑した待合室でさりげなく隣に座り、落とした物を拾って渡す親切な他人を装ってそいつはおれに話しかけた。

「向こうの方が待遇いいだろ？　金も女も思うがまま。エリートさんがエリートできなくなってる状況なわけだし、裏切ってもいいかなって思わない？」

「……何を成そうとして警官になったか、それに照らせば答えは一つだ」

1メートル先には聞こえない小さい声で。

「それにまあ、恩もある」

「へーえ。忠義ってやつ？」

おれを試そうとしていたそいつはにやりと笑って、

「さすが血統書付き」

「嫌味のつもりなら意味ねえぞ」
そうしておれはずっとこいつに、お前は犬だと言われて過ごしている。

Even if

君がこの店から帰れないように細工をしよう。なあマスター頼むよ、あの時計の針を10分遅らせてくれ。それだけでいい。後はうまくやるさ。

あれ、時計遅れてません？ えへへーそうなんですよ。彼からのプレゼントで。

忌々しい腕時計。マーキングしてんじゃねえよクソ野郎が。

喪失

あれから二年が経った。たとえば雑踏の靴音を耳で拾うこと。似た背格好に振り向くこと。同じコートを目で追うこと。

解けない呪縛みたいだ。こんなところにいるはずもないのに。

馬鹿みたいだろ、もう二年も経ってるんだぜ？

彼女がおれを置いて逝ってしまってから。

まな板の上

連日の激務で疲弊していて、帰るなりソファに身を投げ出した。
「着替えた方がいいよ」
「んー……」
目を閉じて曖昧に返事をすると、腹の上に重みを感じた。重い瞼を上げる。
「……服の中に手を入れるな」
「えーいいじゃん」
寝てていいから、とあちこちボタンを外される。
「ちょっ……待て触るな！」
「いいからいいから」
触られて力が抜けて、理性が、視界が、
「待てって……ほんと、無理だから」
だって、されるだけで、終わったら絶対寝ちゃうのに、

「たまにはいいよ」
よくねえよ。
理性が叫ぶそれは声にならず、抵抗空しく目を閉じた。

三千世界の

夜更けに鴉が死んでいて、車に引かれないよう道路脇に避けてやった。これは高杉に殺されたのかもしれない。夜明けを歓迎しない男による蛮行。

「大丈夫？」

「うん。お前の終電は？」

「……大丈夫」

もしかしたらその男は、お前を寝かすつもりのないおれ自身かもしれない。

うそつき

いらだってるのは見て分かる。理由もまあ、わからんではない。
「触んじゃねえ」
かといって毎度そんな態度なのは困る。
「さーわるものみな、傷つけたー」
「茶化すな」
「茶化してない」
仕方ねえな。押し殺して笑った。
「女には優しくしてやれよ」
男には必要なくても。おれには、必要なくても。

酒と泪と女

酔った勢いでもいいからして欲しいと思わないことはない。

「酔ったら勃たないけどなー」
「そうなんですか？　じゃあ酔った勢いって」
「酔ってるのは女だけ、かも」
「それは…恥ずかしいですね」
「気を付けろよ？」

そんな風に笑いながら、なんでもない雑談みたいに話さないで。

酒と泪と男

いつも淡々としている後輩が、酔った勢いってあるんですかね、と俺に聞いた。

「酔ったら勃たないけどなー」
「そうなんですか？　じゃあ酔った勢いって」
「酔ってるのは女だけ、かも」
「それは…恥ずかしいですね」
「気を付けろよ？」

他の男にさらわれるのは、ちょっと面白くないからな。

酒と泪と男と女

「じゃ、飲み行くか」
「え？」
「酔った勢いってことにすればいいじゃん」
「え、だってさっき気を付けろって言ったじゃないですか！」
「おれ以外の男にってことね」
「……え？！」
てっきり怒られるかと思ったのに、彼女は顔を真っ赤にして頷いた。予想外。なんだっけ、こういうのってなんて言うんだっけ。
「なんか……はじめてですね、二人で飲むの」
「ん？　そうだっけ？」
「そうですよ！」
ああそうだ。据え膳食わぬは男の恥、だ。思い出した。

だから、大して飲んでもいないのにもう帰ろうと言った。部屋に来るかと。いつもみたいに怒られるかと思ったのに、彼女は顔を真っ赤にして頷いた。
そうか、と思った。だから灯りは消さない。

「せんぱ……恥ずかしい、から」
「酔った勢いなんだろ？」
「や」

いつもは見れない顔が、見たい。

彼氏いません

寒いから缶コーヒー買って家路に着く。空を見上げて月とか星とかなんかそういうものが出てるのを数える。ふー、と吐く白い息があの人の吐く煙草の煙みたいだ。彼はなぜあんなクソまずいものを吸い続けてるんだろう。唇に残る感触とその香りと、それを思い出してる自分に嫌気が差した。

6月の空はどんよりとしていて、きっちり締めたネクタイと白いシャツの下がじっとりと重みを増す。そういやあの人は涼しい顔してたな、と思い出した。地下鉄の出口を出ればしとしとと雨。雨が降る、空よお前もいとおしい人を思って泣いているのか。そんな短歌を思いつくほどに、おれは。

最近話してないなあと思う。まあ仕方ない。忙しいのは知ってるし、ぶっちゃけおれも忙しいし、会えないとか会いたいとかそういう問題じゃねえし、メールとかめんどくさいし。

でもおれにもたまには会いたくなる夜だってあるんだよ。
呼んだって返事もない。メールは来ない。そんな風におれのことなんかとことんなんとも思ってないようなのに、弱音を吐きたい時に限って。
「明日飯行くぞ☺」
だからってLINEかよ。かわいいスタンプとかやめろよ怖いから。
「大丈夫か？」
わかんねえなぁ。まあ、連絡くれたから許してやるか。

言えない

何度言われても、どう乞われても、あいしてる、の一言が喉を塞いで出なかった。だって無理だ。言ってしまえば戻れなくなる。

「いいから言えよ」
「言いません」
「言うと本当になるから？」
「なりません」
「言った方がよくなるのになぁ」

笑って滑らせる指が憎くて、私は今日も爪を立てた。

距離

おはようと彼は陽気に声を掛けてきたが、外は既に夜の帳がおりていた。なにも言わないおれの複雑な気持ちを知ってか知らずか、呑気にあくびなんかしている。まるで昨日のことが嘘みたいに。

何も気にしていないとでも言うのか。

おれは、こいつの女を抱いたのに。

幼馴染みはたちが悪い

幼なじみに呼び出された。一人で体育館裏に来い、これはタイマンだって宣言して、馬鹿というか無防備というか、一体何で戦うつもりなんだよ。

「今日こそ決着……って、何?!」

「あ? タイマンってエロい意味だろ」

「待ってストップなんかおかしい」

おかしくない。だって、二人っきりじゃん。

君の名前を

明日はお弁当だ。いつもは作らないおいしい物入れてあげよう。なにがいいかな。ミートボールにポテトサラダ、ふわふわの卵焼き、ウィンナーもたこにしちゃおうか。健康のために野菜も、きゅうりかブロッコリーかにんじんのグラッセ、そしてデザートはいちご！

あ、でもやっぱり本人にリクエストを聞かなくちゃ。そうしましょ。

「ね、ね。明日弁当よね。どうしよっか。好きなもの何？」

「ママ！！」

ちが、そうじゃなくて、ええと、……参った。うちには天使がいるわ。

あとがき

ツイッターをはじめて早や五年。都々逸を詠むために作ったアカウントは今やただの日常用で、都々逸はもちろん短歌や川柳、俳句、旋頭歌などあらゆる短詩を綴っています。その勢いでしがない男子高校生が都々逸部を立ち上げるという設定に無理のあるライトノベルまで書くようになりました。

長編を書くようになると不思議と短い文章も浮かぶようになり、思いつくままに書いていた短編を加筆修正してまとめたのがこの本です。ただただ書き散らしていただけのものを読んでもらって、ほめてもらって、気を良くしてまた書いて、とうとう一冊になりました。ありがたいことです。

大事なことなので二度言いますが、普段は都々逸を詠んでいます。興味のある方は「都々逸ヱレキ冊子」「西高都々逸部」で検索してみてください。新しい扉の向こうでお待ちしております。

最後まで読んでくださってありがとうございました。サクセス！

何が好きかと好物問われ君の名前を返す夜

二〇十六年七月二十八日　発行

小早川　著

本書の内容についてのご意見・お問い合わせは
著者のツイッター(@dodoitsu_)にお願いします。